

優秀賞（愛媛県教育委員会教育長賞）

「弟の背中」

今治市立西中学校 3年 八木紗百里

「行ってきます。」

笑顔でそう言って学校へ行くことが、簡単そうに見えて実はそうではないことを、私は知っている。

ある時期、弟は、「行きたくない。」と言って学校を休んだり、泣きながらランドセルを背負って玄関を出て行ったりすることがあった。その度に私たち家族は、どうしてこんなことになったんだろう、と戸惑い、悲しくて、悔しい気持ちになった。弟はその頃、学校で嫌な思いをしていたようだ。心や体が痛い笑顔がなくなる。平日の弟は落ち着きもなく、ため息ばかりついていた。学校で嫌なことがあった日は泣きながら帰ってきたり、思い出して怒ったりしながら、今日の出来事を母に話していたようだ。明日は嫌なことが起こりませんように。少しでも楽しいことがありますように。私たちは弟のために願うしかなかった。

学校にも相談した。全体的な指導や、個別に注意もしてくれたよう

だ。しかし、同じようなことはまた起こった。そんな中で母は、どうしてこんなことが起こったのか、どうやったら回避できたのかばかりを考えるようになっていった。そしていつの間にか、何かされるのは弟にも原因があるのではないか、むしろきっかけを作っているのは弟なのではないかと考えてしまうようになった。

弟の言動が、誰かにとっては腹の立つことだったのではないか。知らないうちに誰かを傷付けてしまっていたことはないだろうか。原因は何だろう。それを、弟の中から必死に見付け出そうとしているように私には見えた。そして、だんだんと、母が弟を責めているようにも思えてきた。

私は、それは違うと思った。大事なものは、いじめは絶対にしてはいけない行為だということだ。いじめられていい人なんていないし、どんな理由があっても、人をいじめていいことにはならない。それを忘れて、いじめられる原因があるなら仕方ない、というような考え方は間違っていると思った。そして、そんな考え方は、既に傷付いている人を、更に追い詰めていくように感じた。

母は私の意見を聞いてくれた。しかし、この時実感した。いじめは、その本人だけではなく、周りの人も傷付ける。そして、その心を壊す。

自分が弱かったせいか、悪かったせいなのかと、どんどん自信を失っていく。判断力を奪っていく。助けてくれるはずの人の声も届きにくい。これはとても怖いことだと思った。

弟はその後、嫌な思いをすることがあっても、その場から離れるなどすることで、うまくやり過ごせるようになった。そして、変わらずいてくれる友達の存在に勇気づけられたようだ。

「また明日ね。」

そう言って友達が手を振ってくれた時、とても嬉しかったと言っていた。久々に顔を上げて手を振り返した時、きれいな青空が広がっていることに気付けたそう。きっと弟にとって友達のその一言は、明日の自分に会いたいと思ってくれる人がいることを教えてくれたのだと思う。

今も時々弟は、あの頃のことを思い出して胸がぎゅっとなる時があるらしい。そして、私もあの頃の弟の、今にも泣き出しそうな背中を忘れることはないだろう。だからこそ私はいじめや差別を許さない心を持ち続ける。そして、誰かの心が弱った時に、その心に気付いて寄り添えるような人でありたい。